

# 巨匠への道

## 第三回 石の教会 内村鑑三記念堂

澄んだ空を見上げるだけで、自然の美しい季節に変わったことを否が応でも思い知らされる。食欲然り、行楽然り、何をするにも最適とされる時季である。個人的には、手始めに行楽の秋を満喫したいと願っている。こんな時どんな装いになっているのか、想像を掻き立てる、ある建物を思い出す。

### 光に満ちた石造りの教会 自然と共生する空間

様々な半円形の巨石で造られているその建物は、軽井沢にあり、木立の中に溶け込みながらも、存在感十二分に佇んでいる。外壁の非直線的に並べられた石の隙間は、ガラスがはめ込まれた採光部となっていて、それが昼は堂内を光で溢れさせ、夜は建物の力強さと優しさを象徴するかのよう外暗闇に光を放っているのである。

主に建物は、教会堂と内村鑑三記念堂で構成されており、入口は石のアプローチを経由して教会堂正面にあるものと、裏の地下一階に位置し記念堂へ通じるものの二つ。見学コースは記念堂からで、上毛かるたの「こ」、内村鑑三に関する資料が展示されている。そして内部を順路通り進んで行くこと、いつの間にか教会堂入口につながっているのである。



●古代の巨大なお金で巨人がドミノしたみたいだなというのが、初見の感想。  
長野県軽井沢町星野 軽井沢町星野/JR長野新幹線軽井沢駅より車で10分、上信越自動車道碓氷・軽井沢ICより20分

### 文=和木 隆

群馬県生まれ。大学在学中に渡英。その間欧州を旅行し多くの古い建築物を訪れる。現在、都内にある耐震診断補強設計専門の会社にて勤務の日々。11月23日にどこに行こうか考えるが今の楽しみだが、企画倒れになることも計画の範疇である。

一周する。そして、気がつくと同じ高さに降り立ち、まるで空間トリックがあったかのように、後方からの再入場となるのである。

### 建物に存在感を与える 歴史、思想、人生、自然

教会堂内部の両壁には水が流れ、それにより植物が自生しており、正面に設置された大きなガラスからは、外の木立と広い空が存分に取り込まれている。石で造られた壁、床、天井を背景に、木製のベンチ、水のせせらぎ、鮮やかな常緑、そして四方からの柔らかな日差しが付け加えられていく。そこは建築家の目指した「石、光、緑、水、木と自然の5大要素」に囲まれた空間そのものである。

興味深いのは堂内のバージンロードである。正面左手の高い位置から壁沿いに曲線を描きながら、教会堂内を一周する石造りのそれは、後方の会堂入口前に続く。花嫁が突然目の前に現れ、人々の視線を集めながらゆっくりと約

唯一残念なのは、堂内撮影禁止であるということ。これは正に、百聞は一見に如かず。行楽の秋を軽井沢にて堪能するのはいかがだろうか。

## えどがわはるみの 勝手にシネマ ★レビュー Vol.4 「ディア・ドクター」

を一緒に食べて、ときおり思い出しように診察をするだけで。村の診療所は過酷だ。次々と突き付けられる村人たちの要求に、男はたつた一人、飄々と応えていく。ときには人情としようしがらみに足を絡めとられながら、ただひたすら本ノックのように、「本物のセンチ」として立ち居振舞う。白衣をかたぐり捨てて逃げたい気持ち、センチモノなりの使命感が気ままになつて、どこにも逃げられなくなる。緩やかに進んでいく日常のなかに、男のどうしようもない虚無感がちらり、ちらりと垣間見えてくる。

「その嘘は、罪ですか？」という予告編に魅せられて、観た。今回は、何といっても西川美和監督の舞台挨拶つき（インシネマテークたかさき）。これは行かない手はない！と思いついて、行ってきた「ディア・ドクター」とある僻地の村の診療所、皆が「センチ」と頼りにする村でたった一人の医師は、実は無免許の「センチモノ」医者だった。男は何者で、どこから来て、どこへ向かうのか。ある日突然、脱ぎ捨てられた白衣だけが、青々と茂るあぜ道に映えていた。映画の冒頭から、田舎町のどかな風景と対照的なセンチメンショナルな騒動に、ぐいぐいと引つ張られていく。男は何者か。なぜ長い間、「センチモノ」で隠しお世話なのか。

常識からすると、「本物」はいつだって清く正しく、「センチモノ」はどこか胡散臭くて悪徳の臭いがする。鶴瓶演じる医師は、そんなセンチモノとは対極にあるような、いかにも人情味溢れるどこにでもいそうな村のお医者さんだ。男には、研修医（瑛太）のような高い志もなければ、村の人たちを騙して高額の治療費をとろう、という悪意もない。ただ、西に咳込む人がいれば背中をさすり、東に肝臓を患う人がいれば問診をし、身寄りのないお年寄りがいれば夕食

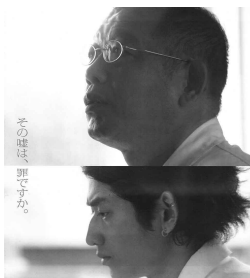
微妙な部分を表現できれば、と思つた（西川監督）

一見うらからで、平和なもの。もつともらしくて、正しいもの。表層には見えないけど、そこには、確かにそうではないものが、含まれている。西川監督の、そこを掏り取るような鋭さが、大好きだ。日常の中は、つくりと口をあけている危うさや、悪意のようなもの。そこに光を当てながら、限りない愛情を注いでいるところに、いつも救われるのだ。「それが人間だ。それでいいのだ。」とバカボンのパパに肯定されるような気持ちになる。「ゆれる」のトーンこそ変われども、偽善の肯定、西川節は健在で、次回作がどうともとも楽しみなのである。実際の監督は小さくて、可愛らしくて、ユーモアがあつて、でもやっぱりよく切れるナイフのように鋭かった。

### 「ディア・ドクター」

監督：西川美和  
出演：笑福亭鶴瓶  
瑛太  
八千草薫

### レビュー度



(C) 2009「Dear Doctor」製作委員会

文=えどがわはるみ

えどがわはるみ ●29歳おうし座B型。京都→大阪→東京と転々としながら09年群馬にカムバック。証券会社を経て投資顧問好き。好きな映画はバトリス・ルゴドフ、故・市川準監督の映画全般。09年高崎映画祭は素直に驚きました！